

美術月評

1月

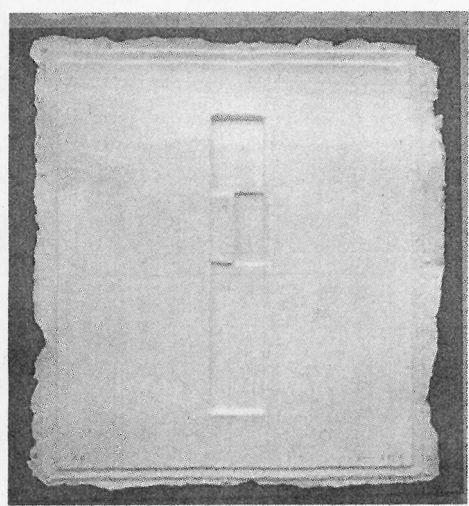
稲嶺 成祚

【山城茂徳版画展】 今月よいと思う。それにしても、は正月気分が過ぎ、まプラスチックの額縁はいかにともな発表が少なかった。こもメカニックでなじみが悪いうした中で山城茂徳は立て続と思つた。

第一回は「Print in the box」のシリーズで、透明の版とシルクで刷つたもの。このBoxのシリーズで、透明の方は二ないし三色の色があるプラスチックの額縁状の箱の中に凹凸をつけた白い作品ものとは趣を異にしている。が入っているものである。凹 去年の個展の作品では、図柄凸は中央部の縦長の四角形に、縦長の平行四辺形となつてしる。そのバリエーション 上下が斜線になつていたが、んで全作品が作られている。 今回の図柄は長方形のも多く作品は一種類あつて、和紙になり、その分平面性への志向凹凸がしるされたのと、プラスチックが強くなつてきている。こうプラスチックの薄板にしるされたした一連の仕事をみているものである。和紙の方が面にと、知的な単純性と真摯さがあすかなみがあり、かつ 山城の身上だと思つた。縁が不定形になつていて、い 今回はいずれも箱(box)かにも人の手を経た感じがあ にこだわつたことが、そのまののに対して、プラスチック イトルにもうかがえる。それの方はすべてにきつちりとして、何かの製品の一部を思わ 者も見る側もつかみ得なかつせるものだった。作品として たのではなからうか。

立て続けの2回の個展

「山城」



山城茂徳作品